

「国土計画考」 - その34

出席：今野修平氏・国土計画研究会メンバー

日時：平成21年8月19日（水）

場所：海運クラブ3階会議室

A氏 松谷さんの本をこの前出されたので、今野先生に、この辺について問題提起をしました。わからないところもあるので、「これはどう考えればいいでしょうか」という質問書を出しまして、今日はそれに対して今野先生が対応していただくという形で、よろしくお願いします。

今野 それでは、国土構造論（未定稿）という形で皆さんのお手元にだけは届けましたが、その後、時間をいただきましたので、「未定稿」という原稿を一応書き直しました。その目次は、いまのところ考えているのはこの1枚のものでございます。

1と2はそういう形で何度か読み直していますが、3のほうは、もう一回テコ入れしたいなと考えております。

これについてはまだ途中までしかできていませんが、今日はこちらのほうが宿題が出されまして、そちらで時間を食うと思いましたので、この目次と、随所で取り上げました、異なる思想に基づいて日本列島の国土構造を図面にした、新全総のときの図面だけはお配りしておきました。もし時間があれば、これの問題点だけでも触れられたら幸いかなと思って、お配りしておきました。

こちらの松谷さんの本の宿題は、「人口流動の地方再生学での論点」ということでいただきました。特に全体の主張の基本をなしている1章、2章は詳しく読んでまいりました。3章以下は一応斜め読みはしておきました。1章、2章の中で、個々の問題提起といえますか、疑問を持ったところとか、この見解はちょっと違うのではないかと思ったところは、約10ページのメモにまとめて、全部で30問題くらい絞って出してあります。

では、これの問題提起をして、議論を順次詰めていきたいと思えます。

A氏 こちらの資料は何でしょうか。

今野 実はこれの参考までに、私が福井に行った30年前に地方都市の研究会を打ち立てまして、そこで細々ながら雑誌を出していましたが、7月に最新号が出ました。その研究会の足跡を振り返ってみますと、いまでは基本の「地方都市問題とは何か」というのを忘れてしまった形で来ているようにも思ったので、5ページばかり小論を書いておきました。これが松谷さんの地方都市とも絡むと思いましたので、参考までにお配りしただけでございます。

時間の関係もありますので、最初にズバリ入っていきたいと思います。問答編でまとめてまいりましたのは、最初にページ、それから、と書いてありますのは、30ほどの問題を順に出しました。最後のページに、全体を通して感じたことを8項目くらい、大きい視点からのものを出しておきました。

最初は、まえがきのところにあったのですが、「誰が地方を衰退させたのか」というところでございます。著者は、経済学に限界を感じた、もっと言えば経済政策論に限界を感じた。そのために、多くの学問分野の視点から見直さなければならないということが、この本をまとめた出発点であると言っております。この本全体の印象としては、そうした問題意識でまとめるとしますと、本当の意味の限界を感じて多角的な角度からの検討をしなくてはならないと言っているわりには、角度が狭いのではないかという感じがいたします。ましてや、誰が地方を衰退させたのかという個人の責任の追及みたいになるのは、こういう角度から社会的見解をまとめるとすればちょっと矛盾するのではないかと。「誰が」という問題ではないのではないかと、という気が私はします。したがってその辺の角度のブレが、全体の論理の構築やら全体の主張を弱めていないかという感じを持ちました。

特に、あとでまた全体のところで触れますけれども、戦後の歴史の中ではたくさんの方が東京に流れてきた。根こそぎ人口が東京に持っていかれて、人口再生力を失ったが故に地方は衰退したのだというのが結論なんです、この人の見解としては。同じ東京へ人口を出すにしても、根こそぎ出ていくという形、

例えば、世帯全部で最後は東京へ出ていってしまう形にならないような政策があったのではないのか。現実には、戦前は地方から東京に根こそぎの形では人口は出ていかなかった、こういうことを言っております。

その辺の見解は私とだいぶ違いまして、追々それに触れていきますけれども、そうした意味で、視点と論点というのがちょっとぶれているのではないかというふうに思ったわけです。

2番目は、地方衰退の最大原因は、人口の大量流出ではなく、次世代人口の再生力を喪失したが故に地方は衰退した、こういうことを言っています。人口移動をメルクマールにして地方を見ようとすると、こういうことが一直線に因果関係としてくっつけられるけれども、人口の移動というのは、戦後日本の変革の半世紀余の中で表面に出た現象の一つであって、それが原因で地方が衰退したということ自体は、ちょっと疑問が残ると私は思っています。もしそこを取り上げて、人口流動から地方衰退の原因究明、政策究明というところに入っていくとすれば、その論理をきっちりと踏まえておかないといけないのではないか、こんなふうに私は常日頃思っております。

人口流動が表面に出てきた病的症状の一つであって、その症状に対応するためということ自体、病理学的にいけば全然答えにならないわけです。表面に出てきた皮膚の現象や顔に出てきた表情の原因というのは、むしろ内臓とか体質とかにあるわけで、そこを根治しない限りは治らないわけです。

したがって、科学的にこの問題に取り組むということであれば（そこが学者の使命だと思いますが）、そういう症状を示している根底の因果関係を洗わないとダメで、病理学的な癌細胞化のところをつかまないと、あるいは、免疫力の変化というようなところをつかまないとダメで、皮膚に塗り薬を塗っているだけでは解決しないわけです。したがって人口移動に対する具体的な政策というのは、それだけに限った形でやっているとすれば本質的な政策論にならないのではないか、こんなふうに考えております。

人口減少というのは表面的に数理的につかまえやすい。人口の数値というのはつかまえやすいし、経済の現象自体がつかまえ方が難しくなっているこ

ともあって、三全総以降、人口がメルクマールになって政策論の基礎になって
いますけれども、人口移動を起こすメカニズムはほかにあるわけです。ほかの
ところを究明しない限り、地方再生学などという、最終的な応用政策が完備す
るところまでの命名をするのはある意味では非科学的ではないか、ということ
をいままで読んだ範囲では感じております。したがって、最大原因は何かとい
うところを人口移動に求めること自体、あまりにも短絡的過ぎる思考過程では
ないかということが2番の問題です。

3番目は、「戦前、地方からの流出人口は再生産力喪失まではしなかった」、
16ページにこういう記述があります。表面に出てきた人口の移動という数だけ
からすれば、これは決して間違った論説ではないのですが、なぜそういう結果
で戦前は終わっていたのかという思考過程が本の記述の中にほとんどないこと
自体、実はおかしいところであります。

それは、明治になってから人口急増が起きる。もっと細かく言えば、幕末か
らそういう動向が明確になってきて、増えた人口の吸収先が、北海道開拓を除
いては政治の歴史の中で作り得なかったもので、その窮余の一策として、いわ
ば結果論ですけれども、侵略戦争やら満蒙開拓ということを起こしていったわ
けです。もし日本が、戦後のように工業地帯が人口の余剰化する数を吸収でき
れば、あるいはああいう帝国主義的な思想が国論を支配することはなかったか
もしれない。そんなふうに考えますと、戦前の実態をもう少しきっちりと、経
済史を踏まえたつかまえ方をすべきではないかと思っております。

そして、国の人口急増が強烈に起きてきて、私は12歳で終戦ですから、22歳
まで農村の中にいましたので、それにとらわれ過ぎているかもしれませんが
ども、農地の拡大が全く不可能になったのは江戸時代です。江戸時代中期以降
は、極端なことを言うと、農地の拡大が北海道を除いてほとんどできなくなっ
てしまった。当然、新田開発で増加人口を吸収するという政策は江戸時代、吉
宗の時代でほぼ終わるわけです。それ以降は新田開発では吸収できなくなっ
てきた。

それをどこで吸収するかということになりますと、プラス面では、大阪に商

業資本が蓄積してきて、都市的な人口の吸収力が少し出てくる。それに次いで江戸が、大阪よりは作画的・政策的な人口増加ですが、その中で商業が出てきて吸収するという形になりました。それで農村の実態はどうだったのかというと、新潟にはいまでも「おじ」という言葉が生きています。次三男になりますと生涯嫁さんがもらえない人生です。おじの部屋というのがあって、労働力として一生、家に尽くすということです。それ以外の人格は一切認められないという形がおじです。次三男は本家を手伝って、死んだときには本家の墓に入る、こういう形になるわけです。

それがある意味では普及して下級武士社会にもあるというので、私が下手な説明をするよりは藤沢周平の小説を読んでもらえばわかりませんが、藤沢周平のたくさんの小説の大部分は貧乏下級武士の次三男の問題です。次三男で、嫁さんももらえないメドがない、分家に出る力がないというのが、庄内藩の中でどう生きたかというのを主人公にしているわけです。

もう一つの小さなはけ口は、大阪、東京へ丁稚奉公で出ていくということが始まるわけです。新潟のおじというのは農村のおじですけれども、非農家における商人の世界、職人の世界でも江戸におじがウヨウヨしているという形で、そのために江戸は男性若者人口の過剰都市であった。それが吉原に始まる女郎屋街を繁栄させていた。このメカニズムが経済的にいけば吉原成立の基礎になるわけです。江戸の独身男性は一生懸命働いて、2年に1、2回、大金をはたいて、吉原は高級ですが、もっと低級な門前仲町とか千住とか、そういうところへ出かけて行って、そして欲求不満を解消していたという形になるわけです。

ついでに言うと、おじ、次三男の処理というのは、明治になってからは多少様相が変わってまいります。下級武士より少し遅れますが、実は下級武士の失業者と一緒に北海道開拓に出ていきます。しかし、明治から今日までの日本の国としての人口の増加量の中で、1割くらいしか力を発揮していないわけです。最大人口から明治初期の人口を引きますと7,000万からの人口増加を来しているわけですが、北海道は結果として支えてくれたのは500万の人口でしかなかったということで、マクロに言えば1割程度の力しか発揮できなかった

た。それに対して、満蒙を主体にして海外に出て行ったのは200万くらいです。

もう一つは、陸軍、海軍をつくって若者を軍で吸収していった。したがって、農村は長男社会で、陸軍、海軍は次三男社会、こういう構造が一世紀支配したわけです。軍の総徴用人数が、第二次世界大戦の末期では軍関係で死んだのは200万を超えていますね、全体が300何万ですから。恐らく1,000万近い徴用をして、それが吸収して、安い給料と農民よりはうまいメシ、この2つの条件で日本の軍は強兵になるわけです。軍に行って一生軍で終わる人が何になったのかというと、伍長、軍曹、曹長という下士官になっていく。そういう構造にしたのは日本陸軍の特徴で、その辺は、定年まで軍隊に勤めた人口を植民の農民にしたローマとはちょっと違う構造であった、こういうふうに言えようかと思えます。

いずれにしてもそうした構造が背景にあったのが、戦後の高度成長に対して次三男がまず最初は東京、大阪、名古屋の三大都市圏に二次産業を主体にして労働力として吸収されていった、こういうことであります。(この点も著者と私では見解の相異点があります。)

ところが、二次産業で吸収していった人口の就職先を見ますと、明治時代初期、資本主義経済が定着した初期は地域資源型工業(繊維、食品加工、木材、窯業)が労働力吸収をしていった。そして農村側から見ますと、繊維が新しく勃興した最大の産業で、労働力を大変に求めたわけですが、繊維が求めた労働力の大部分は女子でした。この女子労働力というのは、「野麦峠」にしてもプロレタリア作家の代表になるわけです。

繊維産業が吸収した労働力は、場所的には、例えば岐阜、長野、北陸、福島、北関東、東北は宮城、秋田の南半分まで、これが戦前では大きな経済になって、いわゆるシルク関係の繊維産業になっていくわけです。「野麦峠」の小説なんかは、女の子がたくさん岐阜に就職していくのに対して、男性は結婚に恵まれずに若くして結核で死んでいく人が多かった、こういうことです。

食品加工で先端を切ったのは清水です。SSKの缶詰や製茶が非常に活況を呈して、明治の末には対米輸出の主要輸出品になるわけです。それがいまでも

尾を引いていて、清水食品やSSKの缶詰等でいまだに対米輸出をやっています。それがさらにほかの分野に広がっていく。それから木材、窯業等。窯業をバックにして名古屋の工業地帯が三大工業地帯化してくる、こういうような背景でした。

繊維は、生糸だけではなく、明治20年以降、綿織物が出てきますが、これが大阪を中心にして張りつきます。したがって、阪神の工業地帯への大規模人口流入というのは綿織物を主体とする産業で、これは大阪市内から始まりまして、主として江戸時代の木綿生産の主生産地、河内のほうで広がって、和歌山まで広がっていくという形で、これが日本の綿織物工業の主体になっていくわけです。ですから、地方対三大都市の単純構造で比較することは間違っているのではないか、こんなふうにも思います。

北陸はその傾向が戦後まで続きました。生糸が終わりましたも、さらに化繊の初期までこれを引きずりまして、本当の意味での衰退が統計的に出てくるのは、いわゆる“ガチャマン”時代を経て、北陸地方の繊維工業の衰退という形につながっていくわけですから、そんな単純な話で明治の初めから三大都市対地方ということにつながっていたわけではない、こんなふうに考えております。

それから、「生産システムの直輸入」ということで、戦後、工業の発展はアメリカの生産システムの直輸入（ライセンス生産）をして、ライセンス生産をする三大都市が飛躍的に発展していく。その供給労働力として全国各地の農村から人口吸収が起きるということを言うておりますが、戦後の経済発展のところで、私の現在の見解とこの解釈とではちょっとギャップがあります。

「復興から成長へ」という昭和30年前後のときの成長というのは、この著者も言うておりますけれども、鉄鋼、造船、セメント、重電が先導していった。これは間違いのないことです。しかし、製鉄、造船、セメント、重電などはアメリカのライセンス生産をしたのだろうか、ライセンス生産のウエートがそれほど高かったのだろうかということで、著者はちょっと踏み込み過ぎていないかというふうに私は感じるわけです。

造船でも、造船に火をつけたのは計画造船で、つまりライセンス生産的に大

量生産できたのは戦争中の軍艦と戦時標準船の大量生産の経験があったからである。あるいは、軍艦製造の技術として、明治から嘗々として、軍事競争の中の5・5・3の少ない需給を克服しようとしてより精度の高い軍艦にしようとして開発していった、日本の軍艦の技術開発というものが大きくプラスしていたわけです。昭和20年8月15日以前の日本が独自に開拓した技術が、戦後の最初の段階の工業化、基礎資源型工業の時代に花開いたわけで、ライセンス生産ではない。むしろライセンス生産はその後、30年を過ぎてからで、いわゆる軽電機の各種が大量に市場と結びつくようになって、大量生産、大量流通、大量消費のメカニズムが動き出したときの家庭電機製品から始まったので、組み立て型の機械工業、特に軍事を背景に持たない戦後日本においてライセンスが導入されるようになり、それがやがて自動車や飛行機にまで及んでいったというふうに解釈すべきで、一直線ではなかったのではないかと、こんなふうに思っています。その見解の違いがありまして、この辺はどうなのかというのは議論のタネだと思います。

「地方においては経済は生きるための生業」とまとめています。ひと言でまとめれば、それは変わりはないわけです。しかし、地方側から見たときの次三男の惨めな人生というものを背景にした日本の地方経済、これが昭和20年8月15日まで、軍に徴用されていったとかいろいろなことで、それを真っ直ぐに見せない要因があるわけです。それはさておいて、出ていった次三男が嫁ももらえない、何度かの女郎屋通いで一生涯が終わるといようなものから見ると、戦後、東京、大阪へ出ていった次三男は長男を上回る豊かさを獲得するわけです。それは高度成長のおかげでありました。それ以降、長男の離村というか、地方を切り捨てる動きが顕著化してくるという形になって、著者が主張しているような再生産力喪失の巨大過ぎる人口移動が起きるわけです。

そんなようなところは、基本的な認識がちょっと私とは違うなあと思っています。ここで一つ切りますか。

A氏 人口の移動の前でちょっとわからなかったのは、戦後、日本がどう

いう産業構造にするかという議論があって、それで日本はアメリカナイズされた産業システムを選択したと主張されています。そこが、どんな産業があったのかというのがわからないのですが、本当にそういう議論があったのかどうか。

今野 それは私自身もよく知りませんから何とも答えようはないですが、著者が言うには、基礎的な資源工業から他の資源工業、ひとまとめにして導入するということをやって、国際分業をそこで拒否したということを行っています。工業生産の国際分業を拒否した。その前に、生産か消費か。特にインフラ論で、生産的な社会資本と、国民生活的な生活資本とどっちの選択をするのかといったときに、下河辺さんから聞いた範囲では、戦後の復興はやはり生産から行かなくてはダメだということで、それが決まったということは聞いていました。昭和20年8月に終戦になって、12月までに、ほぼそういう意見になってきたということは聞いていました。

それは特にイタリアとの対比論で聞かされました。イタリアは、生産資本を中心にすることを断って生活資本に回した。限られた少ない資本を生活資本に回したが故に、拡大再生産の法則が十分に働かなくなってしまった。それがイタリア経済が低成長に苦しむ大もとになった。それに対して日本とドイツは、工業を含めて重工業の復興というところから始めるという経済成長の論理をとって、こういう経済成長による拡大再生産を経て得られた g を生活資本に充てる。そういう基本路線をとったということは耳にしています。

その思想はいまでもそういう意味ではあらわれていて、きのう今日テレビでやっている麻生対鳩山もそういうことで、麻生さんが突いているのはそれではないでしょうか。「経済成長なくして福祉なし」ということを一生懸命説いていますね。だから、そのときの思想を引き継いだと言えるのかなと思っています。

B氏 ここに、製鉄、造船、セメント、重電と書いてあるけれども、朝鮮動乱が始まるまで日本は鉄鋼も全部閉鎖されていたわけです。だけど、日本は

傾斜生産方式をとって鉄鋼と造船とセメントはやったわけです。だから、各地方で石灰の開発やセメントの企業が起きている。それから、造船はそれぞれ企業城下町がほぼそのまま維持された。鉄はある程度制限的ながら高炉が幾つか開かれた。昭和30年ぐらいまでそれで行くわけですね。

今野 東北開発促進法によって、東北開発と言ったときに政府が直営の形で手を出したのはセメント、造船なんですね。東北の場合、鉄鋼のほうは釜石がありますけれども。

A氏 この著者が言っている、戦後、日本がどういう産業構造をやるかという議論があって、日本は重化学工業、生産主体に採用したと言っています。そこは、いまおっしゃった傾斜生産方式のことをこの著者は言っているのでしょうか。

今野 彼はそうです。

B氏 日本は完全な閉鎖経済だったから、そこまでしかなかった。そのときにも、国内だけで独立的に経済を運営すべきか、あるいは海外との取引をやるべきかという議論はものすごくあったわけです。ちょうどその頃、「もはや戦後ではない」という企画庁の論文が出て、それは動乱の波及の面もあったけれども、そこから変わってくるわけです。日本がそこで初めてやったのはラジオとミシンの輸出です。それも国がテコ入れをしながら、マシン部品の生産や何かを始めさせたわけです。

今野 ミシン業界というのは不思議な業界で、戦争中は機関銃生産をしていたのが戦後転業した業界なんですよ。

B氏 部品がね。

今野 そうそう、素地が残っていたから、復興が早かったです。

B氏 だから、ここで言うアメリカのライセンス生産というのは、どういうことなのかよくわからない。

今野 私もそのところはちょっとわからない、という問題提起です。だけど、電気洗濯機や何かが出てきてからは、アメリカのライセンス生産というのはね……。

B氏 そこは技術が大きくなるんだけど、その段階までに、例えば繊維産業は大幅にどんどん転換していくわけです。それから、ナイロンというのもほぼそこから始まって、それで変わってくるわけです。

今野 後で出しますが、化学工業ということのを彼は言っていますが、そこも私と見解が違うわけです。

A氏 土志田（征一）さんの『経済白書で読む戦後日本経済の歩み』 - - 5年ごとに刻んで、それをまた1年ごとに経済白書をベースにして書いた本があって、最近読んだんですけれども、それで見ると、昭和25年頃に傾斜生産方式を採用したと書いてありますね。

C氏 もう朝鮮動乱ですよ。その前とちょっと違う。

B氏 だから、28年を境にしてその前後では大幅に変わるわけです。

A氏 その本によると25年と書いてあります。それで、「有沢広巳の提言により」と書いてあるんです。

B氏 25年頃は、どういう立国をすべきかという議論は随分あった。これは中山伊知郎さんとか、資源のほうは誰だったかな、大激論があった時代ですね。

A氏 そこのところをこの著者は言っているんでしょうか。

今野 傾斜生産方式をとったのは事実で、それによって基本的なテコ入れがされたのも事実だけど、出発点には戦災度があったわけです。海運などは船一隻ないわけですから。鉄道は満杯でこれ以上能力的に力がない。海運を否応なしにテコ入れしなくてはいかんということで選ばれたのが造船の傾斜生産方式です。だから、計画造船の最初の段階でのプロジェクトは、設計図なしの戦前の戦標船と同じ方式でやったわけです。

B氏 それは、各地の中小造船の企業城下町が残れた時代。それがなくなったから。

A氏 そこに対するアンチテーゼ的な産業構造の議論というのは、どういう議論があったのですか。

B氏 いや、アンチテーゼ的ではなくて、経済の発展に従ってそういう移行がされていったと思う。

A氏 もう一つのアンチテーゼ的には、例えば生活産業的なもの、または江戸時代からの地域伝統産業を守りながら産業発展をさせていくという選択肢があったのではないか、ということを行っているわけですね。

今野 その辺は、私はもう一つ反論的なことを書くとすれば、特にイタリアとの対比論でそういうことをどう考えるかということ、先ほど言ったように、

大都市での工業生産力の基本である労働力を農村の次三男に求めたでしょう。そのために、ついこの間まで、あるいは今日までと言ってもいいかもしれないけれども、明治以来、不況になってクビになると農村に帰って、景気がよくなるとまた都市に帰って稼ぐ。いわゆる出稼ぎ型の人口移動だったんですよ。

B氏 それはもう随分あとまでね。

今野 今日でも、ないと言えは嘘になる。その弾力性があったから、「生活資本を重点に投資するのは少し後回し」といったのが通ったと思うんです。

B氏 それは前提にあるけれども、土地所有が全然違っていたわけです。農家の次三男対策どころか、いわば小作と地主との関係がものすごくはっきりしていた。農地解放は何年でしたかね。

今野 23年くらいです。

B氏 そうでしょう。それまでは全然そういう動きはなかった。

今野 農地解放になっても、経営規模が大きくなったわけじゃないから。

B氏 そうなんです。

今野 例えば、日本の海運界で有名な言葉があって、「父ちゃん船長・母ちゃん機関長」と。景気がよくなると、この2人で船を動かして九州の石炭を大阪へ運んでいたわけです。ところが、景気が悪くなると石炭の輸送力はガタ減りになります。そうすると、みんな瀬戸内海の因島や何かの島かげに係留して、彼らは実家のミカン農家に帰るわけです。ミカン農家に帰れば農家は農家で助かるわけです。日本の農業というのは、米作を主体にしてもそうだけれども、

集約農業型で、人的労働力の限界と経営規模が一致していますから、そこに新たな労働力が入ってくれば、単にただ飯を食わせるだけではなくて、農業生産をそれなりに拡大できる。だから、景気の回復を待つという形で、日本の農業あるいは農村社会が、景気の変動に対して非常に弾力的な役割を果たしたというのは、経済史の中で有名な話なんですね。それがイタリアと基本的に違うところではないかなというふうに思います。

A氏 その辺の話というのは国勢調査に出てこないですね。労働省の労働統計には出てくるんです。だから、農家の出稼ぎを含んだ統計と含まない統計と2つあるけれども、国勢調査は、住所はもとに置いたままできているわけですから、人口の動きと国勢調査は違うのでしょうかね。

今野 そうです。もう一つ、それに加えるとすれば、そういう事実をわかっている人が見る国勢調査と、わからないで数値を扱っているのでは解釈が違って来るわけです。これはその危険性をはらんでいるなと思いますね。だから、地方経済を考えたときには特に農村になるわけですが、この著者は農村をどれだけ知っているのかなということを、ちょっと疑問を持ちながら読んでいました。

A氏 いまのところを要約すると、戦後、いろいろ選択肢はあったけれども、日本は重化学工業中心の生産力の産業構造を選択して、その延長線上で行って、そのお先棒を担いだのが全総であるというのをこの人は言っているわけですね。

今野 そうです。ただ、日本が生産重視型の政策を戦後早くからわりに異論なしに選んだというのは、背景に、基礎資源型の鉱物資源が明治の最初から不足していたという宿命があります。それが一つは中国に対する侵略戦争の国内説明理由になっていたわけです。

その上、昭和14年に広畑製鉄所ができます。広畑製鉄所の開所式で、当時、陸軍大臣だったのかな、東条英機がそこにお祝いに行って、「これで対米開戦をしても、それ相当に戦えると決断した」と書いてあるわけです。それが事実だとすると、底流に、基礎資源型の工業での素材提供力を持たないと日本の将来はないというのは、戦後ではなくて、戦前から素地があったのではないかという感じがします。

しかも、戦前からのその思想の一番大きな背景は、日露戦争、日清戦争だったと思います。日本海大海戦もそうですけれども、日本は鉄ができない、船がつくれないで、あの滅亡の危機に直面したときにそれを救ったのは、「三笠」に代表されるように、見境なしに海外の中古船を買ってきて、それでしのいだということは、鉄鋼造船の基礎産業を持っていないとダメだということにつながっていった、基礎としてあったのではないかという感じがします。

A氏 11ページに、「当時の状況から、ほかにいかなる選択肢があり得たかはいまとなっては定かでない」というけれども、当時の状況下でほかの選択肢があったんですか。ほかの選択肢があり得たとすると、鉄鋼とか石油化学をつくらないで、江戸時代からの地域の生活産業を伸ばしていくと。そうすると、イタリアになってしまうんですかね。

今野 そうですね。

B氏 それは、重工業か軽工業かという選択の話ではなくて、軽工業だって全部そのままやっていたわけです。国がテコ入れして資本を集中させたのは、そういう分野から戦後の復興が行われたということであって、その間は何もなかったのかというと、例えば八王子にしても絹か何かの繊維産業があって、産業が高度化するに従って電気部品に変わったという、そういう移行があるわけです。北陸だってそうでしょう。染色・繊維から何から産業が大幅に変わってきている。それは、これを選択するからこれはやらない、という話ではないと

思います。

ただ、15ページの人口増減率で見て、片方は1925年から40年と書いてあるけれども、そのあとの満州 - - 先ほどの満蒙開拓団ではないけれども、200万もの人口が海外に流れた時期でしたね。そういうのと重なっているから、これを短絡させて議論すると、おかしくなるのではないかと思います。

A氏 戦前の人口移動というのは経済的な側面だけではないんでしょうね。戦後はむしろ経済的な側面で若年層が来ているけれども、戦前は、経済的側面以外の人口移動がむしろ多かったのでしょうか。だから各年代別、満遍なく移動しているということでしょうか。

今野 その辺はどうなんですかね。もう少し勉強しないと何とも言えないと思いますね。

B氏 統計だけで考えると非常におかしくなる。ただ、時期的に言えば、1925年から15年間というのは、そういう移動の多かった時期ですね。

A氏 ちょうど昭和の元年から15年ですね。

B氏 満州へのいろいろな策動が行われて、それこそ満鉄だけじゃない、銀行から何から含めて、戦前の人たちはみんな満州へ行きましたものね。

今野 満鉄勤務者が何万だったわけでしょう。

B氏 満州だけじゃない、朝鮮についてもそうだし、台湾についても同じような問題でね。

A氏 日本とイタリアは同じ第二次大戦の敗戦国でありながら、イタリア

においてはなぜ重化学工業という方向に行かなかったんですか。

B氏 いや、行ったんですよ。ENIという会社がつくられて、言うなれば国営企業で、化学から何から全部やったんです。イタリアの南部はそれでスタートして、日本もそれを真似しようという話は随分出たわけです。

今野 イタリア特有の理由もあるんです。それは、戦争の戦火がどこにあったかということ、イタリアというのは地上戦までやりまして、一番激しい戦争が南イタリアのモンテ・カッシーニの決戦だったわけです。ところが、工業生産は軽工業、重工業を含めて北なんです。だから、工業地帯の被害度をパーセンテージに置きかえると、日本より少ないです。むしろリゾートとか、そういう生活関連の供給地は地上戦までやったということが理由の一つです。

もう一つは、塩野七生の本を見ると、政府がやるべきなのは何か。特に社会保障的なプロジェクトとして何をやるのかということを見ると、都市社会から出たところの基本思想と、自給自足型の農村社会から出た日本列島の違いというものもちょっと感じますね。都市がやられてしまったら、個人の力ではどうしようもないですものね。そこに政策欲求の基本があったんじゃないかというふうに思います。

B氏 イタリアもそうだし、ヨーロッパの文化というのは全部、いわば城郭経済みたいな、都市国家からスタートしているでしょう。その中で守られる形。日本はそういう単位がないわけです。逆に言うと、日本ほど激しい労働移動が起きていなかったという面もある。

今野 ヨーロッパの場合、もう一つ、我々と単純比較できないのは、産業革命以降の高度成長と人口移動を考えたときに、非常に緩和剤になったのがアメリカ移民です。ヨーロッパは移民でガス抜きしたからね。

B氏 移民の問題もありますし、労働力をトルコとか方々から輸入した。それがいま、社会問題になるくらい大量になっているわけです。3世代ぐらいになってきましたからね。

C氏 重工業化の選択というのは、終戦直後にされたわけではなくて、25年以降という感じなんですか。重化学あるいは鉄鋼業でも、資源を外に求めないといけないですよ。例えば終戦直後の国土計画基本方針を見ると、反省がずっと書いてあります。戦争は資源を持たない国が外に不用意に求めたことがいけないので、これからはそういうことはしないというような話が書いてあるわけです。GHQが進駐してきたあと、日本の中には資源は十分にあるとか何かいろいろ言うわけですね。海外に求めなくてもいろいろ資源があるではないかというので、TVA型の国土総合開発が重要だという話で、大来佐武郎が奔走してというような話がありますね。

でも、どこかでああいう加工貿易型の話に転換する変曲点があって、傾斜生産の話もそれにリンクしていると思いますけれども、それが朝鮮動乱とかそういう話なのかなと漠然と思ったんですけどね。

今野 そのとおりです。

C氏 戦争の全くの直後というのは、そういうところまで決断してなかったんじゃないですか。

今野 決断する余裕も基本的にはなかったと思う。

B氏 1946年に「石炭・鉄鋼超重点増産計画」というのがあるんです。だから、戦後すぐですね。

C氏 戦後1年後ですね。

B氏 48年に「経済復興計画試案」というのができて、それから傾斜生産とか、農業も、まだ貿易が進んでいない時期だから、アンモニアをつくれという問題があって、東洋高圧の北海道みたいなものがあったり。

C氏 それは肥料ですか。

B氏 農業用の肥料です。それが46年から始まっているわけです。

C氏 じゃあ、終戦後からそういう判断はしているということですか。

B氏 そうです。

今野 だから、その素地は戦前からあるというのが私の見解なんです。そこがこの著者とは違うわけです。

C氏 それは当時のアメリカとの関係では、アメリカも好む方向だったのですか。

B氏 アメリカもそこは容認していた。逆に言えば、鉄鋼の増設というのは認められなかった。

今野 もっと言うと、戦災都市がすごかったでしょう。昭和25年に朝鮮事変が起きて、翌年、特需になるわけです。特需になってそれがフルに動くまでは資源問題はあまりなかった。なぜかというと、日本は石炭だけはある程度ある。一番厳しいのは鉄鉱石資源と石油です。ところが、鉄鉱石資源が戦災都市に山ほどあったのです。僕が高等学校のときにやったアルバイトは何かといったら、自分で磁石をつくって焼けた市街地で鉄屑を拾い、スクラップとして売り、電炉・平炉の小規模鉄鋼業界に売ることでした。

C氏 それを再生する。

B氏 自動車産業なんかない時代だから。

今野 だから、新日鉄より先に平炉・電炉メーカーのほうが息を吹き返したといういきさつがあるわけです。いま語るとそれこそ漫談になるけれど、強力な磁石をつくるわけ。その強力な磁石をつくるノウハウを、我々下級生に伝授する奴が学校でボスだったんです（笑）。それはどういうことをやったかという、鴨居のところに打ちつけてある長い釘とかを集めてきて、汽車のレールに敷いたんです。汽車がダーッと通って行って、みんな平らにする。それを曲げて電極をつくって磁石をつくって、それを腰からぶら下げて、こちらに空き缶をつけて、戦災に遭ったところを歩くわけです。それが銭になったんです。それで間に合ったんです。

間に合った需要は何かというと、あとになって勉強してみたらわかったけれども、朝鮮半島に米軍が兵器を持っていったでしょう。その修理なんです、車から小銃に至るまで。だから、もともと原料が要らないで銭になったんです。これが、昭和20年代の日本の不死鳥と言われた鉄鋼業回復の最初の第1段階です。

A氏 もし朝鮮戦争が起らなかったとしても、日本はやはり重化学工業の道を選んでいたのでですか。

B氏 最初はね。朝鮮戦争の前から、傾斜生産方式に対する四大基幹産業の育成というのをやっているわけです。

今野 それで、朝鮮事変というのは特需を呼び込んで何を教えたかという、加工貿易だと思います。つまり、日本はそこで居すわったままアメリカ軍の車両や何かを修理して、銭になったわけです。買ってくれるのもアメリカな

んです。発注者もアメリカ。

B氏 鉄鋼の第1次の合理化計画というのは1951年～56年。電力の再編成、9電力がスタートしたのも51年。それまではまさに混乱状態だったわけで、その頃に農業の大規模国営開拓事業なんていうのは、食糧増産をしないといけないと。満州や何かは閉鎖されていたからその問題があって、その残りがいま、いろんな議論になっているけどね。

今野 特需の効果というのはすごかったですね。前に勤めていた会社（率直に言えば軍需工場ですが）から勤めていた人のところに - - 僕みたいな田舎にいと、疎開してきたり、戦災で焼け出されてきた人のところに、「帰ってこないか」と電話や郵便が来たわけです。彼らは戦争中の需要工場で鍛えられて技術力がありますから。つまり、終戦直後の東京では飯が食えないから疎開して田舎へ来ている。それが本格的に東京へ戻ったのは25年なんです。朝鮮事変が起きてからです。

A氏 この著者は、当時いろいろな選択肢があったけれども、重化学工業という生産方式を選び、なおかつアメリカのライセンス方式を選んできた。そういう形で特異な生産方式を日本は選択した、そうになっているわけですね。

今野 そうです。

B氏 それも高度成長に入る段階からそうなんです。というのは、石油化学工業がいつ頃起きたかということ、55年頃からの話だからね。鉄鋼は51年から第一次合理化計画というのをやっていて、その頃は広畑だって高炉かまだつくられていなかった時代、許されていなかった時代です。それで53年になって、アメリカのいろいろな思惑もあるけれども、世銀の借款というのが初めてそこに導入された。道路もそうだけど、自動車の初期もそうですね。

A氏 昭和20年代は日本で鉄鋼の生産は行われていたのですか。

B氏 鉄鋼の生産は戦前からあります。あるけれども、アメリカはそれを閉鎖していたんです。

今野 鉄鋼の生産も釜石や室蘭であったわけです。それで、一番打撃を受けたのは北九州。これは大陸の鉄鉱石に全部頼っていたから、中共の支配、国共内戦もあって、大陸から一切来なくなりました。そういう意味で生産体制が一番遅れたのは大陸の資源に頼っていたところですよ。

ところが、アメリカの戦の仕方というのは、どこへ行っても死体と壊れた武器はみんな本国に持ち帰ります。持ち帰ろうと思ったら、朝鮮半島から太平洋を横断してカリフォルニアに持って行かなくてはならない。カリフォルニア自体、鉄関係の工業の弱いところですから、それで日本に目をつけて日本に発注したわけです。それで、さっき言った電炉・平炉から息を吹き返してきた、こういういきさつだと思います。

アメリカにするとそれが特需で大きくなってきて、放っておけなくなりました。中国大陸は望みなしだからといって、鉄鉱石の輸入の道を日本政府と協議して、一番最初はマレーシアでした。ブラジルとかインドではなくて、マレーシアからの鉄鉱石を頼りにした。こういういきさつがあったと思います。

B氏 だから、加工貿易型というのは、それがダメになったのではなくて、日本にはあって、輸出を促進しようというのは55年直前ぐらいからですね。

今野 それから、P21の 番の問題ですが、「なぜアメリカの生産システムを直輸入したか」ということについても、著者と私の解釈は多少違ってあります。実は、戦前の日本の国民経済は、特に重化学工業については軍需に支えられていったと思います。民需で鉄の消費が市場と結びついていたのは、生産システムからすると平炉・電炉メーカーです。生産地で言うと大阪です。そして、

関東は徹底的に軍需に支えられていた。こういうことで、この構造は旧ソ連や共産中国でも酷似しています。そして、消費財産業が特に金属関係については立ち遅れている。いわゆる軽工業という分野は、消費財が明治以来豊かになって拡大してきたわけですがけれども、拡大のスピードは、当然、軍需産業の重工業に対しては負けていた。

ところが、先ほど言った特需に始まって国内での経済循環が起きて、消費市場が大きくなることによって1960年以降、家庭電機需要が爆発した。これが、ライセンス生産、つまり大量生産・コスト安ということの非常に大きな原動力になったのではないかと私は思っています。したがって、アメリカの生産システムを直輸入したというのは、領域も違うし、時間的な解釈も多少、著者と私とはズレていると言いたいわけです。

C氏 ライセンス生産というのは、具体的に言うとどういうことですか。向こうの企業のいろいろなプラントをそのまま買ってきてということですか。

今野 設計図から全部。そういう議論は確かに洗濯機や何かのときはあったんですね。

B氏 洗濯機だの何だので出てきたというのは、最終製品の模倣がある。

今野 そう、模倣があるんですね。

B氏 もう一つ、技術導入という問題が出てきたのは38年頃がピークじゃないですか、化学工業やほかの分野も。昭和50年の自動車の生産台数は日本全体で3万2,000台で、45年には8,000台だからね。

それから、電力需要を見てみると、電力需要というのは全部ダメなんです。我々が大学受験の頃なんて年がら年中停電していた時代でしょう。とてもこういう産業が育成されていくという仕組みではない。それが立ち上がってきて初

めて、いろいろなことが起こり得たわけですね。

今野 日立の社史を読んでもわかるけれども、日本の場合は重電が先なんです。

B氏 まさに傾斜生産ですから。

今野 戦前から軍需と結びついているから、重電が主たる市場であって、日立が軽電機に出てきたときは、啞然としたというか、そういう衝撃があったわけですね。

それから、次に行っていていいですか。日本人が、第二次世界大戦でアメリカに徹底的に敗けて自信喪失になったために、アメリカからライセンスを導入したと言っているけれども、私はこれは納得しなかったです。そんなことはないと思います。日本には日本の素地があったというふうに思っています。

A氏 ライセンス料を随分払ったのはGEに対してですね。そうすると、30年代ですね。

今野 その頃は、日本製は故障が多いとか、そういうような噂はありましたよ。アメリカ製のものは故障が少ない、ただ大型過ぎる、とかね。だから、日本が自信喪失してきているのは、むしろ自由競争で市場開放が起きたあと敗北したことがあって、それ以降ではないかと思っています。

次に行きまして、 番の問題です。人口移動が、地方中核都市を素通りして三大都市に行っている。地方中核都市というのは、ここでは著者は札幌・仙台・広島を代表として意識しているようです。しかし、札幌・仙台・広島というのは三全総ですらるくに論議しなかったテーマですよ。本格的に社会的な思想が出てきたのは三全総以降だと言っていていいと思います。

A氏 50年代後半ですかね。

今野 そうです。だから、二全総のときに既に札仙広福が取り上げられています。これは非常に炯眼でした。しかし、国民の世論なり学者の世論をひきつけなかったですね。(第4図) Bの図面ですが、地方区分をして、その中心が札仙広福と三大都市。七大中核都市の中心をあらわした初めての见解だったのではないかと思いますけれども、やはりこれは政府のエリートの炯眼だと思います。

当時の札仙広福の力というのはそんなにあったわけじゃない。私は仙台が郷里ですけども、仙台なんて工場は2つしかなかった。工業が人を集めているときに、仙台は人口を集める力がないんです。したがって、その頃は人口増加率もよくなかったと思っています。これは何らかの形で証明したほうがいいと思います。仙台と同じような形は福岡もそうで、札幌がそうです。広島だけが、マツダがあったから多少色彩が違います。

A氏 Bというのは新全総のときですか。

今野 そうです。

A氏 そのときにこの絵があったわけですね。

今野 ええ。この絵はそういう目で見ますと、新全総策定までに、国の政策としてはブロック別の開発促進法をつくったでしょう。ブロックが固定したあとなんです。だから、これはむしろブロックから発想していった図面だと思います。それが国民的な理解を得られないで、札仙広福を結ぶのが主軸だという形よりは、むしろ、当時、沖縄は帰ってきていませんから、日本の国土2,000キロの長軸が主軸であるということで書いたAの理解のほうが大きかったと思います。

そういう意味でも、札幌・仙台・福岡が昭和30年代から三大都市圏に流れていく人を食い止める力があつたかという点、全然なかつたと思います。当時、例えば戦争に遭つたときの仙台市の人口は22万です。31万になつたのが何年だつたかなあと思い起こしているんですけども、私が少なくとも大学に入る前は31万までにならなかつた。それがいま100万ですから、成長率からいくと、工業化のあと、と言うと語弊がありますが、少なくとも工業化の後期あたりから急に伸びてきたということだと思つています。それは「広域中心都市」というのから言われ出したので、人生、まだ時間とカネが多少あるなら、その辺も探りたいと思つていますけれども、それが第一です。

第二には、三全総ができて、「地方都市問題懇談会」が起きたときに得られた結論 - - これは故井上孝先生が代表者で、私も委員をやつていましたけれども、そのときには地方中核都市という分類は、4階層に分けて、県庁所在都市クラスを指していたわけです。それをこの著者は地方中枢都市、札幌・仙台・福岡を指しているわけです。その辺で地方都市の勉強がちょっと足りないのではないかと思います。

地方都市がなぜ、農村から出た人口を吸収できなかつたかということの本格的に考察して説得するためには、やはり地方都市の勉強もきっちり論理的に取り組んでもらわないとおかしくなるのではないかと思います。それがP22の問題です。基本がその辺がズレていると議論にならないのではないかと思つて、「地方都市問題とは何か」というのをコピーしてきました。

8番はそういういきさつです。よろしいでしょうか。

A氏 昭和20年代は、確かに熊本も福岡を中核都市として認めていなかったです。まだまだ張り合つてました。

今野 昭和10年代に工業化が日本のあちこちで起きますね。川崎や北九州はその代表都市になるわけですけども、その時点で仙台と熊本と金沢の市長が会つているんですね、大正末期か昭和の1ケタ台の時に。そのときに「日本

三大死都」と言っています。恐らく日本の国内で始まったトップのサミットというのは、それが最初ではないかと言われています。

そのときの議事録をペラペラとめくったことがありますけれども、市長がぼやいているのは、金沢と仙台と熊本はつい50年前までは日本における外様大名の最大の城下町という共通性があって、明治時代になったときは、そのときは人口5万以上あって、いずれも日本有数の都市だった。ベストテンに入っている。にもかかわらず、今日、小学校では木造の校舎しかない - - ということまで3人の市長がしゃべっているんですね。そんな時代が戦前あったわけですから、中枢都市を素通りするというのは当然の話であって、別にそれらの都市が吸収する素地も実力もできていなかった、私はこう思っています。

それから、いまはなくなったけど、NHKの中央放送局は熊本だったんです。それから軍です。

ただ、仙台でも、日銀の支店は仙台になくて、福島でした。仙台支店になったのは戦後です。だから、いかに仙台に経済力がなかったか。日銀にすら無視されていたわけですから、ましてや、岩手や青森から来る労働力を吸収できる力なんか全くなかった。

B氏 だけど、旧制高校をつくるときはちゃんと二高をあそこにつくってくれた。

A氏 核都市という意味はこの時代にはなかったような気がしますね。だいぶ後でしょうね。

今野 それより彼の頭には、核都市の理論性にひかれて固定化して見ているんじゃないかという気がしますね。

B氏 いま、逆に言えば、核都市だけが人口増加で、仙台も100万都市になって、周辺は減っているわけですか。

今野 減っているわけです。

B氏 だから、地域としての人口は全然増えていない。地域的なバランスの問題だね。

今野 そうでなかったら、人口22万が100万になるはずがない。

B氏 どこも大体そうですね。九州なんか顕著に出ている。

C氏 札幌もめちゃくちゃ集めていますね。

B氏 それは、やはり産業構造が変わっているからですよ。戦後の50年ぐらいままでの間は農業人口が40何%でしょう。いまや、それが7%か6%になっているでしょう。

今野 それから、この本の著者に対する不満の一つは、経済史的な時間軸に沿った形で過剰人口をどの産業がこの時代は集めていたか、という解説がないのです。

C氏 これ、松谷編著と書いてありますけれども、この部分は松谷さんが書いているんですか。

今野 松谷さん以外の人のところも全く無視していたわけではなく、斜め読みはしてきましたけれども、これは、率直なことを言って現地報告だけです。何々県何々村ではこういうことがあったと、それが主体になっています。そのところは一橋大の関満博先生と似ていますね。彼の話では常に「カギになる人がいた」という話で終わっているでしょう。

C氏 まあ、人の話が多いですね。

今野 メカニズムの究明につながっていないわけです。だから、そういう事実も我々自身は勉強しなくてはならないから無用ではないけれども、何かその辺がギャップがありますね。

ただ、明らかに感じるのは、松谷さんは、経済学で限界が来たから、もっと広く科学を動員しなくてはならない、それが本書を書いた基礎的認識であると言いながら、それに応じて名前を連ねているのは、社会学の人と、工学の人が一部という感じなんですね。だから、当初の問題意識にしてはちょっと狭すぎるのではないか。

経済学が行き詰まっていること自体、特に経済政策論が行き詰まっていること自体は私自身も感じます。しかし、それを論理的に打破するとすれば、もっとほかの科学を幅広く動員して論議するところから始めないと、ダメなのではないかという感じがするんです。特にこういう空間論というのは。

では、次に進みます。P 22、番号が落ちていますが、の問題です。就業の機会が三地域に限定されているということを言い切っているところですが、三地域を一括して見過ぎていますね。関西経済の地盤沈下が、第一次石油ショックを境にして急に起きるということについては全く触れていません。したがって、人口を吸収する場の構造が不完全であるということが言えると思います。それは、先ほど言った時間軸に沿った産業構造論をぶつけて、人口吸収力をどれだけあったかということを見る経済史的な見方が欠如しているからそういうふうになっていて、工業が人口を集めていた48年の石油ショックまでと、それ以降、三次産業が人口を集めるようになったというこの変革を、明確にとらまえていないというふうに思いました。

B氏 もう一つは、国際化の進展がありますね。

今野 そうですね。そういうことで、このところが抜けているのではな

いかということです。そういう意味で論理的不完全さのまま、「都市に依存した地方の持続可能性は維持されない」と言っています。これが地方が衰弱する基本であって、経済の持続可能性という力は大幅に低下して、今後の方策としてはこれをどうつくるかである。こういう論理がこの本の論調の基本です。

それはそれで総論としては受けとめるのですが、日本の農業というのは自給自足型米作であるという見解が最初から全くないものですから、近代化した形の中で生きる農業は何かといたら、都市を市場として持たない限り農業の未来図は描けないわけです。なのに、「都市に依存した地方」というのは誤解を受ける表現にならないかどうか。都市に依存するな、三大都市に依存するな、彼はこういうことを言っているのですが、日本の人口構造から言って半分を占める三大都市に、日本の農業が経済的に結ばれないで再生できる見込みがあるのか。市場を確保しない農業があるのか。地方都市だけをマーケットにした農業でこれだけの国民経済の伸びを追いかけていけるのか、という見解があまりにもなさ過ぎるのではないかと思います。

まあ、それは言葉の問題だと言われればそれまでですけども、依存ではなく、経済的に市場と生産地という形での結びつきを考えないといけないのではないか、こんなふうに思っております。そうじゃないと、この論理は矮小的な村おこしの地産地消論に終わってしまうというふうにも思ったわけです。

6番から10番まで5つ、そんなことでよろしいでしょうか。

P26・11番の問題は、「多くの地方が共存共栄を図れるのは三大都市圏ではない」。したがって地方都市を中心に、その中でも機能を果たしていない札幌、仙台、広島、こういうのが問題ではないかという問題意識のようですが、市場化戦略の失敗が人口移動になったと考えるのはどうだろうか、こんなふうに思っています。

ローマ時代のロシア、それから、北米が人口吸収力があつた時代のアフリカ、いずれも奴隷ですね。前者の場合はスラヴという言葉の原語がそこにあつたわけだし、後者の場合は、いまの黒人、奴隷、奴隷貿易や何かで、あれは結局、ローマが発展したり北米が発展して、北米の経済と結びつくのに、売る商品が

なくて市場になり損なったために人を売った、そういう経済時代を經由している。こういう解釈を立てますと、地方と都市との結びつきというのは、地方自体が都市に売り込む、商品化する力を持つかどうかということが、近代の中で都市との共存を図れる唯一の道ではないかと思っております、そんなことがちょっと気になりました。

P 26・12番です。「三大都市圏の経済力が突出的で核都市は低迷している」というのですが、核都市・札幌・仙台・広島が低迷していると一刀両断で切ってしまうていいのかどうかというのは、問題ではないか。むしろほかの地方都市論の中で見れば、それ以下の都市が低迷していて札幌・仙台・広島に集中してきている。これはなぜかという、三大都市圏、特に東京との結びつきというので、基本的な分野でつながっているからではないかという感じをいつも持っているものですから、そこで、先ほどの終戦直後の政策選択も絡めまして、後世、安直な評価になっているのではないかとということであります。

それは、議論されましたような重化学工業と傾斜生産方式についても、それから、国土政策における開発と整備 - - 国土政策自体は、開発だけ追いかけていたのではなくて、整備の問題を大きく取り上げて、戦災都市をどう復興させるかというのは国土政策史の中では一つの大きな分野を占めています。したがって整備論を中心にした政策論でいけば、いわば松谷さんの見解との距離は小さくなるのかもしれませんが。

それから、戦災復旧のカネは本当は三大都市圏に集中注入されたというようなことも数値的に証明できれば、非常に面白い議論にはなると思います。

しかし、1940年代における開発のカネは明らかに戦災都市よりは、北海道、東北、南九州、つまり食糧生産のところに大量に流れていったのではないかと思います。5年間を過ぎたあとでこれがどういうふうになっていったかというのは、農業投資が当時は大きかったことの証明というのがあまり手元にない。しかし、感覚的にはそれがあって、それが只見の総合開発とか、四万十開発とか、20年代に叫ばれていった基本になっていることまで考えますと、電力再編もそれに影響を受けたというので、農業振興政策時代 - - それ以外のことは侵

略国家の汚名の下でできなかったということもあるのかもしれませんが、その時代認識をどうするかというのは、議論としては多少残るのではないかと考えて出しているのが、この13番です。

A氏 13番までで切っていただいて、14番以降は都市づくり的なところがあるので、梅田さんもおられたほうがいいと思います。

この27ページのところですが、重化学工業、それに産業が集中して立地する、それから港湾が必要だ、そこは三大都市圏しかない。日本は戦後、重化学工業の道を選んで、そこは三大都市圏にしか立地できない、そこで三大都市圏の集中が起こって地方都市が衰退した。その全体をリードしたのが全国総合開発計画である、というのがこの著者の大きなスケルトンですよ。

そこで一つお伺いしたいのですが、重化学工業だと。そうすると、それは三大都市圏にしか立地できないんだという形は、結果的にはそうかもしれませんがけれども、当時からそういう形は考えられていたのですか。例えば、秋田に鉄鋼が立地するようなことも一時は議論されたりしましたね。あれは無駄な努力だったのか。最初から日本は重化学工業で、三大都市圏に集中して産業を振興していきながら経済成長を図っていくと、そういう考え方をとっていたのでしょうか。

今野 うまく議論を受けとめることにならないかもしれないけれども、一つは、重化学工業こそ集積だという立場に立っていますよね。それは、計画経済におけるコンビナート、戦前のロシアのコンビナート政策に相当影響を受けているなという感じはしました。

コンビナート化というのは、鉄鋼生産と石炭生産の輸送コスト削減上の交通政策なんです。それによって輸送コストを削減することによって、何百キロも離れたところに両方の製鉄業を興す。これはウラルとクズネックの事例ですが、それを戦前のソビエトが実行するわけです。対独戦争の戦略事業として。最初は、鉄鉱石産地に石炭産地から石炭を専用列車で運ぶわけですがけれども、帰り

は空っぽですから、それに鉄鉱石を積んで石炭産地に運ぶという形にして、コンビナート論というのができるわけです。そのコンビナート論の影響から抜け出せないでいるのかなと思います。

それから、日本において東京湾なり大阪湾での集積論というときに、コンビナートなのか、それとも臨海工業地帯の開発によってそれを人為的になし遂げるのかというのは、今度会う約束になっている飯島先生と随分昔にやった記憶がありますけれども、それを結びつけたのはいずれも、海外資源に依存せざるを得ないということでの港湾投資の効率的な政策論だったと思います。両方も船が大きいものですから、一つつくったところを両方で使うということが結果として結びついていったのが一つ。

もう一つは、それが実現するときには、その間に石炭時代から石油時代が変わってきているわけです。石油がパイプで結びつくことで集積立地をしていった。これは主として火力発電と石油化学と石油精製、この3つですけれども、そういう結果になっていった。

だから、いまでも鹿島の場合は、物流的な解析をしていくと、あの石油立地と住金とは直接結びついていないのです。現実的には、住金を使う大量の電力が鹿島火力からもらっているということだけで、石油精製と石油化学、あるいは発電と石油の流れとを比べると、非常に弱い。ただし、それが結びついたこと自体は日本では非常に衝撃的でした。それが、ロシアの場合と全く違う状況なのに、コンビナートという言葉が日本的に定着してしまったと言えるのではないかと私は思っているわけです。

B氏 戦前の段階で鉄鋼業や何かを支えていたのは、石炭産業との関連で、あるいは八幡なんかは朝鮮の経営という問題も含めて、石炭や何かのそれぞれ輸送費極小化の問題があったわけです。そこがコンビナートとほかの産業との結びつきにまで拡大したというのは、やはり戦後の話です。石油産業が軸になったときからですね。

だけど、いまはそこがまた変わりそうですね。鹿島石油はいま、少し後ろ向

きになってきているでしょう。むしろあり方が変わるのではないか。鉄鋼も八幡や何かは大幅に変わったし、室蘭があれしまったでしょう。それから、戦前の釜石だって変わっている。新日鉄の君津だって、いま、何か違うことを考えるという議論になりつつあって、どうも世界的にその辺は変わってくる可能性がある。それに代わるものは、中国の鉄鋼の生産量が急激に増えてきたり、そういうことがあるので、日本はこれから何をやるか、むしろ戦略的に考えるべき問題が出てくるんじゃないですかね。

A氏 我々は、コンビナートというのは、原料輸送というよりも、その中で起こってくる例えばエネルギーとか、原材料のやり取りという形で思っていたわけですね。いま、そこどころがだんだん離されてきて、単独重化学工業というのが、例えば鉄鋼会社でも石油会社でも……。

B氏 だから、石油コンビナートはそういうやり方だけど、それと鉄鋼とはもう切り離されているわけです。

A氏 そうすると、この論者が言っている、重化学工業というのはフルラインだ、コンビナートだ。そこは三大工業地帯、東京、大阪、名古屋の3つの港しかないんだ。だから三大都市に集中して地方が衰退したんだと、この論理はある面では正しいのでしょうかね。

今野 そうですね。ただ、論理構築をしていく際にもう少し広角的に見たほうがいいと思います。それは何かというと、例えば重化学工業の集積が、ここで言うフルライン整備と絡んで日本に起きたのは三大湾だけだと言いますけれども、それを考えていくときに、例えば水というのは大変重要な資源だったんですね。

例えば輸送上から言えば、三大湾だけが、大型船を入れるのに投錨条件とか、停泊条件とか、用地造成条件ではいいんですけれども、それだけで見れば瀬戸

内海はもっと素晴らしいわけです。しかし、瀬戸内海というのは、水島の工業地帯の計画やら福山の工業地帯の計画にタッチしたジェネレーションの一人として言うと、水が非常にネックでした。それから君津についてもそうなんです。水がネック。したがって、千葉には鉄鋼は成り立たないのではないかという雰囲気、一時、あったんですね。それが、利根川からの水を確保できる道が見つかって開けたわけです。

そういう視点で、この辺の言い方については、結論にあまりにも急いで結びつけ過ぎているなと思いますね。

C氏 実際には熟知していなくて、漠然と思っていたんですけども、太平洋ベルト地帯のところというのは、もともといろんな軍需産業が点在していたわけですね。そうすると戦災に遭ったとはいえ、その素地みたいなもの、ファンダメンタルが整っていたというところが大きいのではないかなと思います。

B氏 港湾なんて全くそうですね。それ以外なかった。

今野 さっき言ったように、戦後の出発点が旧従業者に対する2枚目の赤紙だったでしょう。結局、それを無視しては意味がないし、市場論から言っても、徳川家康以来最大の市場形成にほかより早く前進させたのは東海道です。徳川家康はそこを見抜いていますから、東海道には外様を一つも置いていないわけです。

A氏 戦前に重化学工業のシーズがあったわけですね。あれがなぜ太平洋側にずっと立地したかというところは、どこかで分析されていますか。それが、例えば港湾とかの立地上の問題なのか、それとも戦略上の問題なのか。ただ、明治時代はターゲットはロシアですね。だから、日本海側よりも台湾に持ってくるとか、戦前でいくと、相手国はどこかという形で、要するに産業立地上の問題なのか、軍事上の問題なのか。どうして太平洋岸に軍需産業が立地し

たのかというのは、そういうところは分析されていますか。

今野 地政学的な解析はないでしょうね。戦前は禁止されていましたが、戦後は、地政学自体が触ってはいけない分野になってしまったから。

A氏 例えば三菱重工の長崎はなぜあそこに立地したのかというのは、産業立地よりは、恐らく軍事上の問題ですね。

今野 そうです。

B氏 最初はね。だけど、三菱重工はあとの工場展開は全然違うからね。

今野 佐世保もそうだし、呉の造船所も。

B氏 それを引きずっているから、困っている。

今野 同じようなことで最も有名なのは和歌山下津で、あそこは艦砲射撃に遭わない。それから、あの地形だと、空襲されても急降下爆撃されないというのがあったという話がありますね。

A氏 なぜ裏日本が形成されたかという本を買いまして、それを読むと、明治維新の流れになっていて、特にナンバー校、八高までの旧制高は全部、明治維新の延長線上で太平洋岸に置かれた。要するに金沢しかなかったとか、死んだ子の年を数えるような本なんですけど、明治維新のところで何か一つ流れがあるんですかね。

今野 明治維新のときに既に、例えば東京、大阪が東海道、それに次いで瀬戸内海軍、これの素地というのは経済的にも非常に大きいです。だから、

軍事的な配置を除いてもそれなりに説明はできる。しっかり歴史を見てそれを
使えばね。

A氏 27ページの後ろから5～6行目のところで、重化学工業で、その
地域は三大都市圏しかないんだと。これはものすごくわかりやすい表現ですね。

今野 逆に言えば、それで日本の鉄鋼製品は安く世界に進出したわけです。
それが戦後の経済成長の基礎になったことは事実ですよ。

私は一枚かんでいますがけれども、コスタリカの大使館に勤務するとき、ちよ
うど日米の鉄鋼の貿易摩擦の最中でした。それで外務省から、コスタリカに行
くのだったら、1泊余分につけるからサンフランシスコで調査して電文をくれ
と。当時、カリフォルニア州では、ブリキの板がクリーブランドでつくられた
鉄よりも日本製のほうが安い、これはダンピングだということが議会で問題に
なっている時でした。

C氏 それは60年代ですか。

今野 昭和50年代です。それで、サンフランシスコからコスタリカに行く
前の晩に、徹夜で報告書を書いて電報を打ったんです。いや、それは違うと。
日本の主張としては、海上輸送でオーストラリアから鉄鉱石を入れて、できた
製品をまた船でロサンゼルスに持ってくるほうが、クリーブランドから3,000
キロ鉄道輸送するより安いから買っているんだ。その証拠に、パナマ経由で日
本の鉄鋼はアメリカの東海岸を何も蹂躪していないと報告しました。そうい
ふに電報を打ったことがありまして、それはある意味では役人らしからぬ一
面もあったかもしれないけれども、客観性を持った報告書だったなといまも自
分では思っています。

ラテンアメリカも地震大国で、屋根材として軽いからブリキ板の大需要地な
んです。私も、コスタリカへ行ったこと自体が鉄を中心とした貿易摩擦の問題

だったので、ラテンアメリカについても、太平洋側についてはそういう可能性は十分にあるということを書いて、自分の口実にもしたことがあります。

そのあと帰ってきてから、ヨーロッパに行く機会がありました。フランス政府が日仏文化協定で意見交換をしたいから来いという形で、日本政府がその協定に基づいてカネを出してやるというものだから、役人の海外出張なのに文部省がそう言ってくれて、文部省がカネを出してくれて行ったわけですね。そのときに見学したい箇所というので、ダンケルクのユジノールの製鉄所をつぶさに見たいと言ったら、1日かけて案内してくれたんです。それで私が見た結論は、これでは日本は製鉄業で十分に勝てると思いました。

というのは、話が長くなって恐縮ですが、製鉄所の中での物流コストというのは、鉱石揚げ場、高炉、工場内の移動コストが大きいウエートを占めるわけです。それをダンケルクへ行ったら、潮位差が大きいのでドック方式で港湾にもものすごくカネをかけて、拳げ句の果て、構内の鉄道敷設量が日本の10倍近いわけです。鉱石置き場から高炉製鉄所まで、高炉製鉄所から製鋼所までの距離が猛烈に長いわけです。何でこんなコストの高い製鉄所が勝っているのか、と思いました。ダンケルクだから、市場は我々より近いですよ。ヨーロッパ全域が近い。だけど、生産コストは日本より極めて高い。だから、十分に勝てると思って自信を持って帰ってきました。生産の規模も、日本は新しいですから高炉の容量はケタが違って大きいです。

だから、彼の見解とは合うところもあるけれども、合わないところもある。

B氏 太平洋ベルト地帯に集中しているというのは、日本海側にはそれに対応したような港湾建設ができないということですね。鉄鋼や何かのあれのような……、気象条件も大幅に違うからね。秋田とか、それから新潟もうまうまいかなかったけれども、石油基地にしても何にしても難しいんだね。だから、規模が制約されてしまう。

今野 それから、そのあとまた別にドイツへ行ったときに、デュイスブル

グのドイツの製鉄所にまる1日かけて行ったけれども、あそこもそういう目で見ると、ロッテルダムで全部バージに積み替えて持ってきているでしょう。日本は直接ですからね。

B氏 日本は新しいからじゃないですか。

今野 そうです、新しいからです。君津なんか、鉄道の距離が線路延長で500キロか何かしかないんです。

C氏 デュイスブルグはもともと資源立地型であったからあれしたんでしょうけど、いまは輸入するから。

今野 そこで強い競争力を持っていたから、衰退産業と言われながらも、今日まで結構ドルを稼いできている。

B氏 だから、中国の鉄鋼はブラジルから鉱石を輸入しているわけでしょう。国内であっても、それを輸送するよりはるかに安いという問題だからね。

今野 商社の人と会っても、鉄鉱石を買い付けに行く際は、どこにどれだけ低コストで船に積めるかという角度から選んでいるわけですね、鉱物資源の賦存量と積出しコストを。

A氏 今日はこの辺が一つの重要な点ですけれども、問題提起として非常に面白い本ですね。国土計画に対する真っ向たる批判的な論文でもあるので、きちんと受けとめなければいけないのかなと思いますけど。

では、今日はこれで。(了)